

第IV部門

円山川にまつわる土木偉人の地域的評価に関する研究

近畿大学理工学部社会環境工学科 学生員 ○田井 彬普

近畿大学理工学部社会環境工学科 正会員 岡田 昌彰

1. はじめに～豊岡市が生んだ土木偉人・沖野と赤木

近年大規模な水害が多発し、兵庫県では防災対策の啓発事業も催されている。一方、豊岡市では近代の治水・砂防の基礎を築いた地元出身の土木偉人、沖野忠雄と赤木正雄（写真-1）の功績が再評価されている。本研究では文献・ヒヤリング調査をもとに、両者の経歴や仕事内容、功績の展示方法に着目し、地域的評価の特徴を明確化することを目的とする。

2. 2人の土木偉人と円山川

沖野忠雄は豊岡市大磯、赤木正雄は同市引野に生まれる。大学卒業後両者ともに内務省に入省し、それぞれ治水工事、砂防工事を全国各地で数多く手掛け、それぞれ「治水の神様」・「砂防の神様」の異名をもつ^{1) 2)}。一方、円山川（写真-2）はかつて多くの住民を悩ませた暴れ川であり、特に豊岡市中心部の湾曲部「大磯の大曲り」は治水の最重要点であった¹⁾。

3. 沖野・赤木の経歴と地域的評価

本章では両者の生まれ育った環境・家柄・故郷への貢献度などを比較し考察する。

(1) 生家周辺の地形（図-1）

沖野の生家は「大磯の大曲り」の水衝部付近にあり、付近の集会所には水害を知らせる早鐘が設置されていた³⁾。増水時に響く喧騒な鐘の音は彼の記憶の中に刻み込まれていたと考えられる。

一方、19世紀末当時、赤木の生家（写真-3）のある円山川・出石川の合流部付近の堤防は未だ不連続で流路が定ま

っておらずしばしば氾濫し、離村者も多く存在していた。

(2) 家柄と生家の特徴

沖野は下級武士の家で生まれ、青年期に養子に出されている。一方、赤木の実家は但馬地域第2位の田畑面積を所有するほどの裕福な大庄屋であり、川舟や水防竹林をもつ家屋は地域の防災拠点としての役割も果たしていた（写真-4）。また、地元引野村（現豊岡市）の荘官であった赤木の父親は私費による堤防改修など公共事業にも熱心であった。

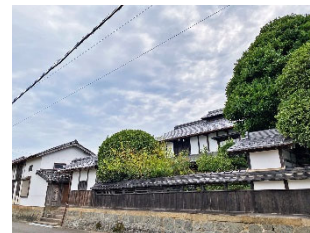


写真-3 赤木の生家

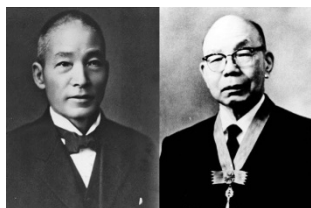
写真-1 沖野忠雄と赤木正雄
(近畿地整豊岡河川国道事務所)

写真-2 円山川



写真-4 旧赤木家に現存する川舟（左）と水防竹林（右）

(3) 故郷への貢献度

沖野は地元の河川改修に対する強い要望を十分に理解していたと考えられるが、全国の数多い暴れ川にも精通しており、私情を挟まず全国レベルでリスクの高い河川から優先して改修している。実際、第二期河川の低位ランクに位置づけられる円山川の改修は後回しとなり、結果的に沖野による故郷への貢献は十分に認識されなかったものと考えられる。

一方、内務省技師・政治家として活躍した赤木は、全国のみならず円山川の一级河川編入や但馬小中河川の改修などに尽力しており、故郷への絶大な貢献が広く認識されていたものと考えられる。

(4) 内務省退官後における政界進出の相異

内務省退官後わずか3年で他界した沖野であるが、生前に一度貴族院議員への推薦が検討されるも「四囲の事情」によって見送られていることがわかった³⁾。

一方、赤木は同郷の貴族院議員である古島一雄の推薦を獲

図-1 沖野・赤木の生家
周辺部の地形

得ののち、同院議員への当選を果たす⁴⁾。地元への貢献度に伴う知名度と名声の高さがその背景にあると考えられる。

(5) 豊岡市名誉市民の称号の有無

赤木のみ、1971年に豊岡市の名誉市民の称号を授与されている。ここにも前節同様、両者の地元における評価の差異を読み取ることができる。

4. 石碑・銅像と展示館の展示法における地域的评价

沖野の石碑(写真-5左)は天日槍^{補注(1)}が祀られている出石神社(同市出石町宮内)の境内に建立されている。この神社は県内においても長く「土木の神様」と称されているものだが⁵⁾、この石碑に託された神的イメージは地元における沖野の人物像を明確に示しているものと言える。すなわち、わが国の治水技術の発展における沖野の功績は神格化されるに値するものであり、いわば超越的存在として崇められていたと解釈できる。なお、建立に際しては元内務省の職員や議員、赤木正雄らによって沖野忠雄博士顕彰碑建設委員会が組織されていたことがわかった。



写真-5 沖野の石碑(左:1959年)と赤木の銅像(右:1965年)

一方、赤木自身が直接その改修工事を指揮した円山川の畔に整備された塩津公園内において、但馬の地元住民によって収集された募金 350 万円にて赤木の銅像が生前に建立されている(写真-5右)。銅像除幕式には多数の地元住民が参加していたことから、赤木の人望の厚さが窺える。

両者のもつ輝かしい功績にも関わらず、このような相異は

展示館の展示方法にも明確に反映されている。赤木の生家の一部改装した「赤木正雄展示館」(写真-6)が2013年に開設されている一方、2021年現在沖野に焦点を当てた資料館等は一切存在しておらず、出石川防災センターに簡易なパネル展示が存在するに止まることわかった。



写真-6 赤木正雄展示館

5. 結語：ローカルな赤木、グローバルな沖野

沖野忠雄・赤木正雄はともにわが国の治水・砂防技術の発展に大きく貢献し輝かしい功績を残しているが、故郷における地域的评价には大きな差があることがわかった。地元住民は、暴れ川である円山川の改修工事など目に見える形で地域に大きく貢献した赤木を「恩人」と評価し英雄的に扱っている。一方、地元のみならず全国の状況を熟知するが故に、内務技監として大所高所から客観的に事情を判断していた沖野は、結果的に地元最優先の治水施策に傾倒することはなかった。地元の神社において「神格化」こそ行われるも、このことが結果的に沖野を地元住民の意識から遠ざけたものと解釈できる。この両極的な地域的评价の背景には、「ローカルな赤木/グローバルな沖野」という両者の視点の大きな相異があったものと考えられる。

参考文献

- 1) 豊岡市史編集委員会(1987) 豊岡市史.下巻
- 2) 立山カルデラ砂防博(2001) 物館世紀を越えて伝えたい SABO
- 3) 松浦茂樹ほか(2010) 沖野忠雄と明治改修, 土木学会
- 4) 赤木正雄(1963) 砂防一路, 全国治水砂防協会
- 5) 木村達一編(1988) 赤木正雄博士とその令兄, 赤木一彦刊

補注(1) 日本書紀や古事記に登場する神話の神。但馬地方においては大規模な治水工事を行い繁栄の基礎を築いたとされている。

表-1 沖野忠雄と赤木正雄の経歴と地域的评价

	沖野忠雄 (1854-1921)	赤木正雄 (1887-1972)
家 柄	下級武士	大庄屋
内務省退官年 (退官年齢)	1918 年 (64 歳)	1942 年 (55 歳)
退官理由	淀川の堤防が決壊しその責任を負い退官	昭和初期から 55 歳が定年
議員経験の有無	無	貴族院議員・参議院議員
故郷へ貢献した事例	少ない(円山川第一期改修工事に助言)	多い(中小河川工事や一級河川編入など)
石碑・銅像	没後(1959)に出石神社境内	生前(1965)に豊岡市塩津公園内
故郷での展示館の有無	無(出石川防災センターに簡易パネル展示)	有(生家の一部を改装した展示館)
勲一等瑞宝章	受章	受章
豊岡市名誉市民章	未受章	受章(1971年)